

松本市の文化財

第 5 集

県・市指定（指定文化財の概略）

松本市教育委員会

目次

一	芳川のタキノジユウム	(松本市天然記念物)	昭和51年10月21日指定	1
二	和田のコウヤマキ	()	昭和50年11月11日指定	2
三	常楽寺のコウヤマキ	()	昭和50年11月11日指定	3
四	伊和神社のケヤキ群	()	昭和50年11月11日指定	4
五	橋倉家住宅	(長野県宝)	昭和51年3月29日指定	5
六	宋版漢書	(重要文化財)	昭和55年6月6日指定	7
七	弘法山古墳	(史跡)	昭和51年2月20日指定	9
八	金銅製天冠	(長野県宝)	昭和44年5月15日指定	12
九	内田のササラ踊り	(松本市重要無形民俗文化財)	昭和51年10月21日指定	14
十	大安楽寺大日如来座像	(松本市重要文化財)	昭和55年3月18日指定	16
十一	正念寺の仏像	()	昭和55年3月18日指定	17

正念寺阿弥陀如来半跏像及両脇侍立像
正念寺地藏菩薩立像

十二 西善寺の仏像 (松本市重要文化財)

西善寺阿弥陀三尊像

(昭和36年1月24日指定)

西善寺阿弥陀如来座像及両脇侍立像

(昭和55年3月18日指定)

西善寺地藏菩薩半跏像

(昭和55年3月18日指定)

十三 西善寺名号雨乞軸 (松本市重要有形民俗文化財)

昭和55年3月18日指定

十四 旧松本高等学校本館及び講堂 (長野県宝)

昭和56年2月2日指定

十五 水野家廟所 (松本市史跡)

昭和55年3月18日指定

十六 玄向寺の境内 (松本市名勝)

昭和55年3月18日指定

十七 稲倉城跡 (松本市史跡)

昭和57年12月20日指定

十八 法船寺の境内 (松本市名勝)

昭和57年12月20日指定

あとがき

芳川のタキシソジュウム

一名 称 松本市天然記念物 芳川のタキシソジュウム

二 所 在 松本市大字芳川小屋六〇〇番地

三 所有者・管理者 松本市

四 概 略 タキシソジュウム（すぎ科）は学名の属その

ま、の呼名で、和名では沼杉・落羽松・二列葉水松などと呼ばれている。地質時代の第三紀の頃北半球全域に繁茂していたもので、日本にもメタセコイヤなどと共に化石として各所に見出されているが現在では北米南部からメキシコにかけてのみ水湿地に見られる雌雄同株の落葉

針葉樹である。乾燥地にも育つが水湿地のものは「膝」と呼ばれる呼吸根が地上に伸び出る特性がある。また枝に長短二型があつて。長枝には鱗片状の葉が互生し、短枝は5〜10cmに伸びて薄い葉が二列に互生し、イチイ（葉は厚い）やメタセコイヤ（葉は対生）に似ているが、メタセコイヤと同様秋には短枝ごと落葉する。この苗木は明治末期に日本に渡来したといわれ、信州には北信に数本、池田町会染に一本、片丘に一本、この芳川（芳川小跡）の一本が知られてい、いずれも同じ位の大きさのものである。

この芳川のは幹囲二、六m高さ三〇mにも及び乾燥地のため気根は見られないが、何の損傷も認められず、樹姿の整った樹勢のよい少ない存在である。

水湿地を好む植物であり、木の周辺はできるだけ乾燥を防ぐ様管理すべきである。



芳川のタキシソジュウム

和田の Kouyama

- 一名 称 松本市天然記念物 和田の Kouyama
- 二 所 在 松本市大字和田三三〇番地
- 三 所有者・管理者 同所 萩原 貞視
- 四 概 略 Kouyama (すぎ科) は高野山に多いことから名づけられたといひ、高野山では六木の一、木曾では五木の一と言われている。日本特産種で主として中部地方以南、四国・九州に分布するが、飛んで福島県の一部にも見られる雌雄同株の常緑針葉樹で、生長のおそいことで知られている。葉は二枚が接着したもので短枝に茶筍状につき、少なくとも三年以上は落葉しない。また樹形が極めて端正でヒマラヤシダー・ヨウスギと共に世界三大公園樹または美樹といわれ、東照宮では御神木としてい



和田の Kouyama

和田の Kouyama は幹囲四、二八 m、地上五 m 附近から二幹に岐れ、高さ三十 m にも及び樹姿樹勢共に恐れなく県下随一の巨木であろう。

常楽寺のコウヤマキ

一名 称 松本市天然記念物 常楽寺のコウヤマキ

二 所 在 松本市大字内田二〇九〇番地

三 所有者・管理者 同所 常楽寺

四 概 略 コウヤマキ（すぎ科）については和田のコウヤマキ参照

コウヤマキの巨木は県内に数少ない。

常楽寺のコウヤマキは小笠原秀政の手植という書類があるので、少なくとも三百年以上の樹令で、幹囲三、四〇m根廻り八、三〇m高さ二五mで、市内では和田のコウヤマキに次ぐ巨木で、コウヤマキの典型ともいえる樹姿端正樹勢も盛んでよく管理された美しい木である。



常楽寺のコウヤマキ

伊和神社のケヤキ群

一 名 称 松本市天然記念物 伊和神社のケヤキ群

二 所 在 松本市大字惣社五三九・五四〇番地

三 所有者・管理者 同所 伊和神社

四 概 略 ケヤキ（ニレ科）は北海道を除いて本州・四国・九州の低地や丘陵に分布するごく有りふれた落葉高木で、生長が早く花に雌雄の別があつて同株に咲き、樹令の長いもの一つで大木になるが、その材は世界の木材中優位を占めることもあつて殆んどが伐られ、今では巨木老木は神社寺院などに単本か数本が残されているに過ぎない。

伊和神社はその境内わずか三二七八㎡の範囲内に目通り一mを越えるものだけでも二六本を数えることができる。その最大のもは、かつて県の天然記念物の指定をうけたものであり、今は主幹の空洞は著しいが側枝は健在である。

ケヤキのこのような群落的存在は、この地方の古い林相のおもかけを止める代表として極めて貴重である。

ケヤキは特に陽樹なので、生長の早い常緑針葉樹の混植を絶対さげなければならぬし、林床を裸地化して乾燥することも慎まなければならない。

橋倉家住宅

一名 称 長野県宝 橋倉家住宅 一棟

二 所 在 松本市旭二丁目一〇一

三 所有者・管理者 同所 橋倉 正安

四 構造形式並びに規模 母屋は木造平屋建、一部二階建、屋根鉄板葺、切妻造、前後に下屋庇を付す。但し母屋背後に木造平家建、鉄板葺、切妻造の便所を建て母屋との間を鉄板葺の廊下で連絡する。母屋梁行九・一一m、同桁行十一・七九m、延面積一五三・三三㎡。

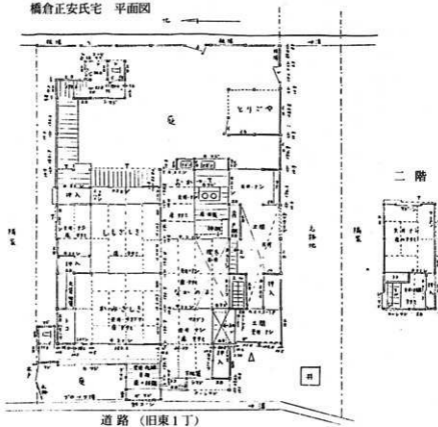
五 創建等 橋倉家は旧松本藩士で、その詳細な系譜は不明であるが、少なくとも江戸時代末期以降は、旧侍屋敷町（旧東之丁）の現存住宅に代々居住してきたと伝えられる。

江戸時代の禄高や役職についても不明であるが、その住宅の形式や所在地からみて、五〇石未満の武士階層に属したと考えられる。建築年代はその様式や部材の風蝕程度からみて、19世紀前期に建築されたものと推定される。

六 考察 旧東之丁は旧松本藩士の住宅の並んでいる侍屋敷町で、現在もその名残りをとどめる家が多いが、橋倉家住宅はそのなかでも、江戸時代の景観をもっとも良好に残している家である。屋敷の大きさは間口約6間、奥行約10間である。住宅は切妻造、平入で、大戸口は直接道路に面して開かれているが、客座敷の表には塀があり、以前はここに簡単な門を備えた板塀が建っていたといわれる。橋倉家住宅の間取は、下級武士住宅の典型的形式を示すもので、大戸口を入ると通り土間がありそれに沿って、6帖（主人の書斎兼応接室）、なかのま（居間8帖）おかつて（8帖）が並び、その奥にかみざしき（10帖）しもざしき（8帖）納戸（4帖）がつくられている。また二階には床の間のついた6帖間

がつくられ、母屋の後方には渡り廊下で連結した別棟の便所がある。この住宅の内部の形式は、長押を省略していること、かみざしき以外は天井を省略していること、かみざしきの表側に雨戸をつけていないことなどに、武士住宅に対する厳しい規制をうかがわせるが、一方内部の雑作は念入りにつくられ、建築材料もかなり立派なものが使われている。橋倉家は、このように江戸時代の武士住宅の形式を近年まで良好に保持してきており、わずかに台所流し、縁側雨戸等が改造されたに過ぎず、外観も屋根を当初の板葺から鉄板葺に改めたり、ガラス窓を加えるなど若干の改造が行われているが、江戸時代の武士住宅の特色をよく保持している。

橋倉正安氏宅 平面図



宋 版 漢 書

一 名 称 重要文化財 宋版漢書 慶元刊本（内六冊補配本）

劉之問、黄宗仁刊行跋

二 所 在 松本市開智二丁目六番二十三号 市立松本図書館

三 所有者・管理者 松本市（図書館保管）

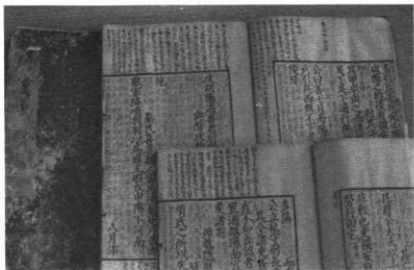
四 概 略 本書は南宋時代慶元年間に、福建路建寧府建安縣において、劉之問（字元起）・黄宗仁（字善夫）が共同

して出版した三史のうちの『漢書』で、刊行の年号によって慶元刊本と呼ばれている。

現存する巻数は、目錄・引用書目等の首目（一冊）、紀一卷（二冊）、表六卷（四冊）、志十卷（十一冊）、伝五十五卷（三十六冊）で、欠巻分は符谷棧斎が明版六冊（うち一冊は宋版と重複）をもって補配。六十冊からなる。

体裁は袋綴冊子本で、室町時代と認められる朱色表紙を装し、後補の白地題簽に「前漢書『幾』」と外題される。版式は左右双辺、有界、半葉十行、行十八字、注双行二十四字、版心は細黒口、魚尾、稀に「蔡」「辛」などの刻工名があり、各葉左端上に耳題を掲げている。宋諱は慎、玄、弘、殷、匡、恒、貞、微までで、文中には墨返点・送り仮名、朱句点・朱引があり、上下欄外には『史記』『文選』『論語』『通鑑』等の諸書からの注記書入れがみえ、その多くは筆跡よりみて室町五山僧の手になるものと思われる。

また、目錄末に本書が甲寅（紹興四年・一一三四）から丙辰（慶元二年・一一九六）にかけて校正されたことを示す黄宗仁香文、引用書目の後に宋景文公校勘の十五本に加え、新たに十四本を三校した旨を伝えた慶元嗣歲端陽日の劉之問識語、列伝第一末に「建安黄善夫刊・千家塾之敬室」の本記がみえて、前掲上杉家旧藏文化庁本と同版であることを



宋 版 漢 書

示している。

本書は、狩谷棧齋旧蔵本で同版本である上杉家旧蔵本（現・文化庁保管）に比べると欠巻は認められるものの、各冊の体裁および目録の編成において旧態を存しており、上杉家旧蔵本にみえない黄宗仁の文が付刻されていることは注目される。

なお昭和五十六・七年度において文化庁の補助、指導を得て修理を施した。

弘法山古墳

一名 称 史跡 弘法山古墳

二 所在地 松本市大字出川丸山一〇〇番地(墳頂部)

三 所有者・管理者 松本市

四 構造形式等 形式は前方後方墳で、四世紀後半の築造と考えられている。主軸の長さは約六十三mで、後方部の幅は約三十三m・高さ約六m、前方部の幅は二十二m・高さは約二mという墳丘でとらえられているが、自然の地山との区別が容易ではなかった。ただし後方部は元の墳丘頂部から一・二m前後削平されているとみなされる。

内部構造(後方部)は地表下約一m前後に人頭大の河原石が敷設されており、約六・六m×五・四mの方形で、この中央部に長さ五m幅一・三m(中央部)深さ約〇・九三mの堅穴式石室が検出された。なお天井石はなく、壁体部は河原石であった。

出土遺物は、ガラス製小玉・四獣文鏡・鉄斧・鉄剣・銅鉢・土師器などがあつた。

五 経 緯

昭和四十九年 三月二十二日 古墳の所在が確認される。

昭和四十九年 五月二十四日 調査団により調査開始。

昭和五十一年 六月 二十日 国の史跡に指定。

昭和五十一年十二月 八日 全面積(六六・四七六㎡)が松本市の所有地となる。

昭和五十六年度 国(文化庁)の補助事業により古墳の環境整備事業を実施。

六 特 色

〔一〕 丘陵突端を占める古式古墳の形式をそなえ、また、まれにみる恵まれた自然環境（眺望）をそなえている。

〔二〕 前方後方墳の形式を示しており、東日本においても最も古い序列の中に入るもの。

〔三〕 内部の構造主体（堅穴式石室）は特異かつ雄大な構造を示している。

〔四〕 鉄斧や鏡の性格等を考える上で重要な資料が得られた。

七 現 状 古墳前方部を○・5m後方部を1m盛土で保護するとともに、方形の形状を明瞭にしてある。

また既設の道路は埋め戻しをして、山腹の形状を原型に復し環境を保護している。



北西方向から古墳をみる



四獣文鏡



石室と外被施設

金 銅 製 天 冠

一 名 称 長野県宝 金銅製天冠

二 所 在 松本市浅間温泉 松本市役所本郷支所

三 所有者・管理者 松本市

四 概 要 この天冠は銅地金張りで、狭帯の額当式の立竪系統に属するものであって、厚さ約一mmの銅板に鍍金したもので、裏面は錆化して緑青色を帯びている。

帯部は右側一部を欠失していて、現長二三cmとなっているが、復元した全長は二七cmを計測する。端末の幅は四cm、こゝから中央の立竪に向うに従って緩やかに高まり、立竪の接触部で幅四・五cmとなる、上縁には、毛彫手法による二条の並行線と、その間に同様毛彫の波文と小珠文を配しているが、底部は一文字をなし、素文となっている。

帯部中央の立竪は長さ一八・七cmで、帯部と一連の金銅板から成っていて、この基部は幅四・八cmで、上端へ行くに従って緩やかな膨みもちながら狭まり、上端花形裝飾の基部で二・二cmとなる。

花形裝飾は中央と左右の三枝に分れる。三枝ともに先端を失っているが、中央の先端は宝珠形を呈していたものように、左右のものは上方へ向って半円を描いて尖葉形を呈していたものと推定される。

この立竪部の両縁辺に沿って、帯部上辺から連続した毛彫に依る並行線と波状文および珠文が左右の尖葉部下辺の尖端まで続いている。

中央立竪の基部両側に、帯部上辺に一cm余り裏面で重ね、二本の円形鋸で連結させた左右の立竪は、右方の部は欠失しているが、外向斜上方へ向って弧線を描き、その下辺は一度緩く突出し、尖葉形で終っている。この長さ一三cmで幅



出土品実測図



復元模造品

は帯部接着部で二・三cm、上部で幅三・三cmの幅広となっている。周縁には同様に並行線と波文及び珠文が施してある。

なお、この帯部右側裏に堅樞、左方の立竿裏面に布帛残片が共に錆着いていたが、布帛残片は平織の麻布系統に属するもので、冠帯内面に綴付けて、全部が肉体に直接しないようにした裏裂か、頭部を被覆した布の残片であろうと考えられる。

この天冠は昭和三十年九月、当時の本郷村浅間の桜ヶ丘古墳から発見されたものである。国内古墳発見の天冠関係遺物は基だ例が少く、それ等は何れも各形状を異にしている。この天冠も従来発見のものと同形状等を異にしていて、天冠の形式に一形式を加えたものとして貴重な資料である。

内田のササラ踊り

一名 称 松本市重要無形民俗文化財

内田のササラ踊り

二 所在 松本市内田

三 保存団体 内田ササラ踊り保存会

四 概 略 サラサ踊りの発生は江戸時代以前と言われるが定かでない。この踊りは各地で行なわれていたが、内田地区では保存会や町会の人々が中心になり、盆踊りを中心にして地域のなかでよく保存されている。

内田地区は古くは信濃の官牧のあったことから、献上馬を送り出すときの「身ぶり手ぶり」が始まりだといわれており、その後牛伏寺の信仰に結びついたものと思われる。この馬を送り出した日が八月十五日だったことから、信仰と結びつき、盆踊りの形をとり大衆化してきたもので、かつては、この唄や踊りがお盆を中心に牛伏寺の庭で行なわれていた。

ササラという楽器は原始的なもので、長さ約24cm・巾約3cm・厚さ約9mmの竹の板を三十八枚ほど合わせて根元をシナノ木の皮で結び合わせたものである。踊りは、昔からササラを持たない人はうちわを持つか、前の人の肩に手をかけ足の造作だけで踊るといふ素朴なものであったが、現在は（昭和二十年代から）手をつかうように振付されていて、唄の文句も昭和時代のもので、昔からのものは伝えられていない。

五 現 状 地区内の常楽寺で盆踊り（8/14・8/16）として踊られている。若年層に教えたり、地区外の行事へ参加して踊るなど保存伝承に努めている。

内田ササヲ踊り

「唄」

駒を飼いたる昔の牧に

内田千戸の花が咲く

丸くできて内田でしぼし

月も踊りの仲間入り

竹も切られてささらとなりて

可愛娘の手にすがる

泉小太郎は鉢伏育ち

内田若衆の男意気

丸くなるほど調子がそろい

ささら踊りの夜が更ける

貢の名馬をいだせし郷に

今も名残りの牧の内

峯はまだ雪ふもとは青葉

間のおいで湯は花ざかり

登れ五千尺鉢伏山へ

四方の景色は日本一

ささら踊りのささらの音は

月が落ちててもまだやまぬ

横の大樹に月傾きて

踊り賑う常葉寺

お月さちよろり出て横に雲抱きやる

おらも抱きたやお十七を

江戸へ五十五里 名古屋へ五十里

お伊勢様へは七十五里

誰も踊らにゃおら三人で

四角三角ソバのなり

姉さ出て見ろ向井の山で

猿が餅つく木の又で

月は端山へ入るとままよ

踊りやめまい夜明けまで

盆にゃござれよ 盆中にゃござれ

死んだ仏も盆にゃくる

松はこの世のあやかりものよ

枯れて落ちてても二人づれ

こぼれ松葉を手でかきよせて

主のおいでを焚いて待つ

ささら ささらとなる音を聞けば

はねた仕事も手にゃつかぬ

奥山のもみじふみわけ ふみわけ わけて

しかと話がしてみたい

一日あわねば二日、三日、四日、五日、六日

七・八日、九日、十日もあわねよだ

内田極楽お寺が四ヶ所

朝な夕なに鐘がなる

月はまんまる踊りもまるく

人の心もまんまるく

内田新ソバ娘の手打ち

できもよければ味もよい

内田よいとお蚕どころ

娘くれたや嫁ほしや

深山紅葉に鳴く鹿よりも

内田娘の情に泣く

つれて参ろう牛伏寺様へ

娘十九の厄除けに

今年しゃ豊年鉢伏山に

八と残った雪のあと

桑の青さよたすきの赤さ

小唄かわいや顔みたや

内田よいとこ一度はおいで

お寺参りや湯遊びに

大安楽寺大日如来座像

一名 称

松本市重要文化財

大安楽寺大日如来座像

二 所 在

松本市女鳥羽二丁目五番四号

三 所有者・管理者

大安楽寺

四 由緒・概略

大安楽寺は真言宗の寺院で、中世

まで松本城北旧徒士町の北方にあったものが、近世の初めに松本城の鬼門鎮護として現地に移されたと伝えられる。明治の廃仏により廃寺となったが、のちに再興した。密教寺院の常としてこの大日如来は客殿に安置されている。

製作年代は藤原時代末期から鎌倉時代の初期と考えられる。

像高五十五・五cm、面巾十・七cm、面奥十二・八cm、寄木造り彫眼体部構造には鎌倉時代の快慶の技法がみられる。台座・光背は近世の後補である。



正念寺の仏像

一名 称

松本市重要文化財

正念寺阿弥陀如来半跏像及両脇侍立像

松本市重要文化財

正念寺地藏菩薩立像

二 所 在

松本市寿豊丘(百瀬) 一三一八

三 所有者・管理者 正念寺

四 由緒・概略 正念寺は、松本地方では数少ない、天台宗浄免願寺派末の寺である。阿弥陀如来は本尊であり享保九年の木食僧相阿上人の作である。本尊の胎内からは銘板が発見されている。地藏菩薩は、空幻明阿作と伝わる江戸時代のものである。

△阿弥陀如来半跏像▽

總高163 cm 像高106 cm 寄木造半跏像玉眼

脇侍 観音菩薩 像高60.2 cm 寄木造立像

脇侍 勢至菩薩 像高60.6 cm

△地藏菩薩▽

像高159 cm 面奥21.5 cm 面巾19.5 cm

寄木造彩色、玉眼、左手に宝珠、右手に錫杖



阿弥陀如来半跏及兩脇侍立像



地藏菩薩立像

西善寺の仏像

一名 称 松本市重要文化財

西善寺阿弥陀三尊像

西善寺阿弥陀如来座像及両脇侍立像

西善寺地藏菩薩半跏像

二 所在 松本市和田(境) 一三一五

三 所有者・管理者 西善寺

四 由緒・概略 西善寺は天台宗浄免願寺末の寺であるが、開基年暦は不詳であり、現在は庫裏と一体の本堂を残すのみである。この仏像(三件五体)は明治の廃仏の際、松本清水の念来寺から当時末寺であった西善寺に移したもので、松本地方の天台律宗の中心であった念来寺の歴史を知る重要資料である。阿弥陀如来座像及両脇侍立像と地藏菩薩半跏像は念来寺六世空幻明阿の作で江戸時代のものである。いずれも松本地方最大の像である。

△阿弥陀三尊像▽

製作年代は鎌倉時代前期と推定される鋳銅製の立像で、善光寺如来といわれる。長野県から関東方面にかけてはまれにみる美作である。

(詳細第二集へ掲載)

△阿弥陀如来座像及両脇侍立像▽

本尊阿弥陀如来は寄木造玉眼入りの丁寧な作であり脇侍もともに整っている。



地藏菩薩半跏像

△地藏菩薩半跏像▽

像高 本尊阿彌陀如来座像 167 cm
脇侍 観音菩薩立像 205 cm
脇侍 勢至菩薩立像 210 cm

半跏の足先からの像高が三・五四メートルの大きな像である。寄木造金漆仕上げ・地藏形・玉眼・半眼に開き、丁寧な作といえる。



脇侍(観音像)



阿彌陀如来座像



脇侍(勢至像)

西善寺名号雨乞軸

一 名称 松本市重要有形民俗文化財

西善寺名号雨乞軸

二 所在 松本市和田(境) 一三一五

三 所有者・管理者 西善寺

四 概 略 仏像類と同様にもとは念来寺の所有である。空蒼上人の筆による江戸時代(元禄六年)の作で大きさは長さ6.7m・幅1.5mの長大なものである。雨乞の時使用された掛軸である。



旧松本高等学校本館及び講堂

一名 称 長野県宝旧松本高等学校本館及び講堂

二 所 在 松本市県三丁目一番一号

三 所有者・管理者 文部省（信州大学）松本市

四 構造、形式並びに規模

本 館 本造二階建・屋根瓦葺・寄棟造、ただしコの字型に折れ曲り玄関周囲に切妻破風及びマンサード型破風を付す。

梁行九・〇九m、桁行（折れ曲り延長）一三六・三五m、延面積二、四七一㎡

講 堂 木造平屋建一部二階建・屋根鉄板瓦葺・切妻造、ただし屋根の一部に小塔及び切妻破風を付す。

梁行二五・四五m、桁行三七・三十m、延面積九五㎡

五 沿革・概略 大正九年に創立開校された旧制松本高等学校の本館と講堂である。この建設工事の詳しい記録等が不明であるが、大正九年に竣工したものとみられる。戦後学制改革により信州大学の校舎となり、昭和48年3月まで使用された。

この両建築は、明治時代中期における旧ナンバースクール高等学校建築の建設のあとを受けて、大正時代前期に高等学校が飛躍的に増設された時期の建築の代表例であり、大正前期の木造洋風建築の作例としては規模も大きく、また、

保存の良好な代表的作例と考えられ、また、学校教育史及び学校建築史上においても、大正前期の旧制高等学校の状況をもっとも良好に伝えている。

また、西洋建築様式を簡略化して木造建築に応用した洋風建築で、日本の公共建築に多く用いられた様式の代表例とも言える。



本館（玄関）



講堂

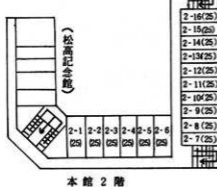
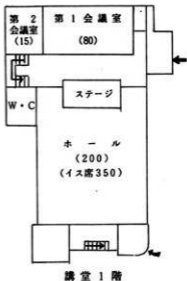


本館(校舎)

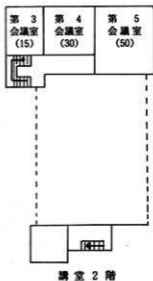
現状平面図



(南校舎)



(南校舎)



(あがたの森文化会館)

水野家廟所

一名 称 松本市史跡 水野家廟所

二 所 在 松本市大村(玄向寺墓地隣接)

三 所有者・管理者 玄向寺

四 由緒・概略 水野家は寛永十九年から享保十年まで六代八十四年にわたって松本藩の領主であった。水野氏は松本旧本町の春了寺(廃寺)を菩提寺とし玄向寺を墓守寺として廟所をかまえたが、ここに遺骸を葬られたのは水野忠直(松本水野家三代目)のみで他は供養塔である。廟所は大型の五輪塔九基よりなり周囲には石垣根を回してある。

被葬者・供養者は次のとおり

真珠院(水野忠清 松本藩祖)

福寿院(同 室)

道樹院(水野忠職(二代))

春陽院(同 室)

賢徳院(水野忠直(三代))

柔軟院(同 室)

智徳院(水野忠周(四代))

智清院(同 室)

徳本院(水野忠幹(五代))



玄向寺の境内



一名 称 松本市名勝 玄向寺の境内

二 所 在 松本市大村六八一

三 所有者・管理者 玄向寺

四 由緒・概略 玄向寺は浄土宗の寺で、寺名を念仏寺及び清光寺と称したことがあり、寛文九年松本城主水野忠直の時代に廟所となり玄向寺と改称された。

当寺の庭園は数百株からなる牡丹園及びイチヨウ・赤松の大木からなり、四季折々の美しい景観寺観をなしている。又、参道の石仏群は信濃百番観音・松本札所・三十三番観音・六地藏・槍ヶ岳開山播隆上人像等百五十体余からなり、整然と整備されていて、境内の庭園と相まって優れた景勝地となっている。

稲倉城跡

一名 称 松本市史跡稲倉城跡

二 所 在 松本市大字稲倉一五一〇番地ほか

三 所有者・管理者 柳沢好ほか24名

四 由緒・概略 稲倉城は稲倉部落北背の山頂にある山城で室町時代初めから戦国時代末期の天正十一年（一五八三年）まで浅間郷の領主であった赤沢氏の本城である。

赤沢氏は甲斐源氏といわれる小笠原氏の分家で初代清経が鎌倉時代の初め頃に伊豆国田方郡赤沢郷（神奈川県熱川市赤沢）の地頭となって住むようになり、その地名をとって赤沢氏と称するようになった。

赤沢市が浅間郷に入った時期については、はっきりした史料はないが、建武二年春から秋頃にかけての信濃国の守の来任の折に信用のおける一族の赤沢氏を置いて治めさせたものではないか。正平十年の桔梗ヶ原の戦では小笠原軍の中にも赤沢氏の名が見えるのでこの頃にはすでにここに居たものと推定される。

稲倉城の築城時期も判然としないが、「諫上稲倉山由緒付口上書」（稲倉、増沢薫氏所有）によると建武二年信濃国の守護職小笠原信濃守貞宗が、井川の城に入られた時に小笠原の末孫赤沢校尉が、本郷6ヶ村を拝領して、稲倉に城や居館を作って移住され、建武二年より天正七年（実は天正十一年）まで、二三年の間赤沢氏代々の城山であると述べており「信府統記」にも同様記述があるが、実際には戦国時代初期頃の築城と推定される。

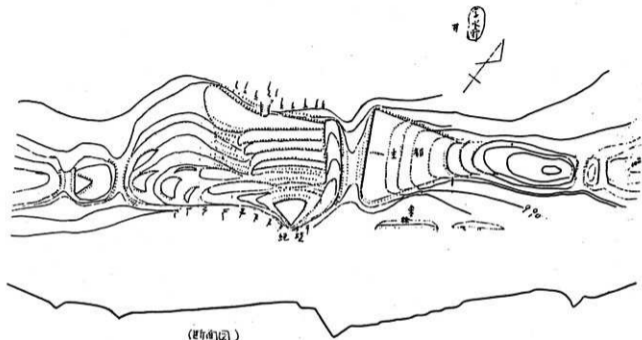
城の東側の谷間は高井の入（竹の入）とよばれるが、これは城の奥という意味であり、この奥に「おてんちよう」とよばれる詰の城がある。

城の東南の山麓には家号として上堀、下堀の名称が今も残っているが、これは明らかに上下二条の空堀があったことが確認される。他に横手の地名も残り、治郎左衛門屋敷は赤沢左衛門尉経康が武田信玄に降復した後、目付として柳沢治郎左衛門虎清を置いた屋敷跡である。

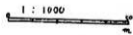
城の大手は城の南西で麓の御屋敷平といわれる稍広い中段の平地は、赤沢氏代々の居跡である。またこの東北の方には井跡、寺跡の地名が残り、赤沢氏の井戸、菩提寺があった所である。他に「おまんず」（御政所）があり、赤沢氏が政務を執った地名も残っている。その他氏神若宮八幡宮が屋敷の北側に明治四十四年まであった。友砦として三才山砦早落（洞山）砦、茶臼山砦、横谷入砦などが本郷地区内にある。

五 現 状 稲倉部落の北方に位置する尾根約五〇〇mにわたって山城は設けられ、急峻な岩壁と空堀によって堅固を誇っている。主郭は標高約一〇〇〇mで白蛇の松といわれる老松があり、南西に五段をつけて下り、大堀に達している。副郭は西斜面に帯曲輪が発達し、更に南には物見台がある。物見台より急斜面を南下すると平坦なわらび平に至り、ここにも数ヶ所に曲輪がある。

これら遺構はほとんど往時のままに残っている。



福倉城跡主要部見取図



法船寺の境内

一名 称 松本市名勝 法船寺の境内

二 所 在 松本市内田二九四六番地

三 所有者・管理者 法船寺

四 由緒・概略 法船寺は標高約七五五mの内田地区南東端にあり真言宗智山派の寺院であるが、この境内には目通り径四・三mの乳をもつ大銀杏、二・〇mと一・一mのモミジ、三・〇mの枝垂桜があり、特に乳をもつ大銀杏は市内入山辺の千手の銀杏に次ぐものである。

境内には建物では鐘楼と観音堂があり、北側には石仏および供養塔が十二基、西側には六地藏がまつられている。境内正面および北側はおよそ二五〇〇㎡で、これら樹木により境内全体が静かなたたずまいを示している。



あとがき

本編は昭和四十二年から刊行された、松本市内の国・県・市の指定文化財の概略を示した集録の中の一編であり、本編をもって昭和五十七年度までに指定された全てを、収録したことになります。不十分な記述等もあろうかと思いますが、郷土の文化財を理解するとともに歴史を知る一助にいただければ幸いです。

昭和六十年三月

松本市教育委員会